

博士学位論文審査要旨

2023年1月10日

論文題目： 近世壬生狂言の研究

学位申請者： 八木 智生

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 山田 和人

副査： 文学研究科 教授 植木 朝子

副査： 文学部 教授 源 健一郎

要 旨：

壬生狂言の研究は、大念仏狂言としての宗教芸能研究のアプローチと縄目地蔵などの縁起説話としての考察が中心であり、壬生狂言の成立や中世・近世初頭の歴史研究が主であった。近世壬生寺の歴史や、その歴史と壬生狂言の展開を明らかにする研究はほとんどなされてこなかった。本論文は、壬生狂言の近世的な展開を実証的に探究し、壬生寺と不即不離な関係にある壬生狂言の宗教性と娯楽性を明らかにしようと試みた意欲的な論考である。

第一部では壬生寺の歴史と信仰の実態を、第二部では壬生狂言の近世期の芸能としての展開を実証的に明らかにしようと試みた。最後に関連資料二編を付す。

第一部第一章では、壬生寺と唐招提寺の本末関係をめぐる争論の整理のなかで近世の壬生寺の位置づけを明確にした。第二章では、壬生寺の縁起説話である六巻本と元禄本との比較考察により、唐招提寺との本末関係が縁起説話に影響していることを指摘した。第三章では、唐招提寺から壬生寺住持に就任した祐海の『融通大念仏桶取之記』から、壬生寺の根源演目であり世話物的な「桶取」にも、仏教的、教導的な姿勢があることを指摘した。第四章では、庶民の参詣人にとって靈験譚よりも「名物」へと関心が移っていることを、近世の地誌や新出資料『洛西壬生寺畧縁記』から明らかにし、この『畧縁記』の成立に六巻本が関わっていることを指摘した。

第二部第一章では、壬生狂言に当初からあった演目である地獄劇に宗教性と娯楽性が一体化した諸相を探った。第二章では新演目として追加された、能・狂言に材を得た「紅葉狩」が壬生寺の太刀説話と、「花盗人」が壬生寺の縄目地蔵の縁起説話と結びついている可能性を具体的に指摘した。第三章では、天明の大火による資金調達のために執行された大坂での開帳の実態を探り、壬生寺と壬生狂言を支援した大坂の講中などの取組の実情などを初めて実証的に明らかにした。

本論文は、壬生寺の信仰と不即不離の関係にあった壬生狂言の宗教性と、多くの参詣人を集める多様な芸能性豊かな近世壬生狂言のあり方を総合的に示すことができた。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2023年1月10日

論文題目： 近世壬生狂言の研究

学位申請者： 八木 智生

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 山田 和人

副査： 文学研究科 教授 植木 朝子

副査： 文学部 教授 源 健一郎

要 旨：

上記審査委員3名は、2023年1月6日、午後2時から約2時間にわたって、徳照館二階第二共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行った。

学位申請者は、提出論文について審査委員3名から出された研究内容に関するさまざまな質疑に対して的確に答えるとともに、専門分野における深い学識を示した。それによって、本論文の研究水準の高さと学術的な価値を証明した。また、外国語（英語）については、口頭試問に引き続き本論文の内容に関わるかたちで語学試験を行い、十分な学力のあることが確認された。

以上のことから、学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

Abstract of Doctoral Dissertation

論文題目： 近世壬生狂言の研究

Title of Doctoral Dissertation

氏名： 八木 智生

Name

要旨：

Abstract

壬生寺は、京都市中京区の律宗寺院で、本尊は延命地藏菩薩である。開創は正暦二年（991）、智証大師円珍の弟子、三井寺の僧快賢と伝えられる。中世には円覚十萬上人導御が融通念仏（大念仏）の道場とした。

本論文は、壬生寺境内の大念仏堂（狂言堂）を舞台として演じられている芸能、壬生狂言を主な対象とする。壬生狂言は、「壬生大念仏狂言」とも呼ばれる。壬生狂言の最大の特徴は、演者が一部の演目を除き一切台詞を用いない無言劇であるということであろう。寺伝によれば、正安二年（1300）に律僧である円覚十萬上人導御が壬生寺で大念仏を催し、その際に仏の教えを身振り手振りで説いたことが壬生狂言の始原であるという。以降も壬生狂言は大念仏の一環として位置づけられる。

先行論では、壬生狂言の成立時期に関する研究をはじめとして、始原や原初的演目に関する宗教性が主に論じられている。近世における壬生狂言の発展、あるいは衆人の目を楽ませる娯楽芸能としての側面については注目されてこなかった。また、壬生寺の歴史的状況や縁起、観客の享受といった、壬生狂言をとりまく環境との関連は論じられていない。先行研究は壬生狂言の一面を明らかにしてきたものの、いまだ対象や方法には課題があるといえる。

そこで本論文は、壬生狂言の近世における展開とその背景の解明を目的とする。壬生狂言の演目が大きく追加され、壬生狂言史において一つの画期となった十七世紀中後期を中心に、壬生狂言の展開を壬生寺の歴史や縁起と関連させつつ、総合的に明らかにする方法を追求したい。まずは壬生寺の歴史的状況と、それが縁起や壬生狂言に影響を与えていることを論じ、参詣人の信仰について考察する。そして、それらを背景として想定し、演目の展開過程について考える。

その際重要となるのが、宗教性と娯楽性という視点である。宗教性の面については、壬生狂言が大念仏という宗教行事の一環として演じられていることから、壬生寺の宗教性と不可分の関係にあることに疑問の余地はないであろう。一方で、近世の観客には、信仰心のみならず、狂言を楽しもうという目線がみられる。それは教導や利益への期待にとどまるものではなく、楽しもうとする態度である。題材や演出によって人々を楽しませる要素を娯楽性と規定するならば、確かに壬生狂言が持つその一面を無視することはできないであろう。

壬生狂言の宗教性と娯楽性は、壬生狂言独自の状況下において生成されている。演者の精神性や、宗教性と娯楽性との関係性といったその独自の状況を、壬生寺の歴史や縁起との関係から明らかにしていきたい。

本論文は、二部構成となっている。第一部では、十七世紀中後期における壬生寺の寺内体制を中心とした歴史的状況と、それが壬生狂言と縁起にどのように反映されているか論じる。

第一章では、壬生寺と唐招提寺との本末関係とその影響について論じる。当時の住持は小槻氏壬生官務家の実子または猶子が就任する慣例であった。壬生家の実子である当時の住持普岳を中心に、唐招提寺との本末関係と住持職をめぐる争論から、壬生寺が近世の本末制度に対応していく過程が明らかになった。慣例に基づく原理と、幕府の寺院政策とは対立し、奉行所での裁判を経て新たに輪番制となる。そして、新たな壬生寺のあり方は、縁起に表れている。室町期の「壬

生地蔵縁起絵巻」(六巻本)と、元禄十五年序の版本『壬生寺縁起』(元禄本)との、壬生家に関する記述には異同があり、それは壬生寺の新たな方向性の反映であることを指摘した。

第二章では、六巻本の欠落発生背景について論じている。まず、六巻本の成立年代を検討するとともに、欠落が発生した時期を示した。欠落の発生は、本末関係をめぐる争論の時期と重なっていることから、当時争論の渦中にあった人々の関与を想定した。六巻本は縁起として壬生寺史の根幹をなすものであり、その内容および構成は壬生寺の本質にかかわる重要なものであった。寺の状況とあるべき姿が縁起に投影され、表現されている。単なる偶然による欠落ではなく、意思に基づく「再編成」であったことを検証した。

第三章では、壬生寺所蔵文書「融通大念仏桶取之記」に注目した。本資料は、導御の事績と、壬生狂言およびその原初的演目「桶取」の由来を述べたものである。制作した祐海は、唐招提寺からはじめて壬生寺住持に就任した人物である。本資料は、大念仏の由来と、「桶取」が導御を中心とした宗教的演目であることを述べることで、壬生寺と壬生狂言における唐招提寺の重要性を説いている。また、導御による「桶取」の宗教性を説く。唐招提寺を中心として、壬生狂言を宗教的文脈の中にあらためて位置づけているといえる。「桶取」に宗教性が付与される過程とともに、壬生狂言が寺内体制と密接に関わっていることを示すことができた。

第四章では、大阪歴史博物館蔵『洛西壬生寺畧縁記』から、参詣人は壬生寺のどのような部分に注目し、壬生寺は参詣人に何を発信していたのかを論じた。まず資料を翻刻したうえで、六巻本が典拠となっていることを明らかにし、制作年代をも推定した。本資料は、庶民にまで及ぶ本尊の功德と、忠岑の硯のような壬生寺の重要な事物を紹介している。中でも壬生狂言は、その由来とともに詳細に述べられており、重視されている。本資料は、本末関係をめぐる争論が決着し、新たな体制となった後に制作された。広く一般庶民を対象として壬生寺への参詣をすすめており、近世期の寺社のあり方を表している。

第二部では、第一部で明らかにした壬生寺の歴史を踏まえ、壬生狂言の展開について論じる。

第一章では、「猿」「桶取」に次ぐ演目である地獄劇に注目した。地獄劇には、大念仏との関係をはじめとする、壬生寺という空間に基づく宗教性が明確に認められる。それは「餓鬼責」によって後世にも維持される。一方、壬生狂言の地獄劇が演じられている頃、すでに『熊野勸進十界曼陀羅』の地獄の絵解きは、人々に興味の対象として認識されている。また、『花洛細見図』によれば、「餓鬼罪人」は「おかしき所作」という娯楽的性質を持つ。地獄を題材としつつも人々を楽しませる演目は、後の娯楽的発展への土壌ともいえよう。

第二章では、次の段階である元禄十五年『絵本壬生狂言』を初見とする新演目群のうち、「紅葉狩」「花盗人」について考察した。第一節では、「紅葉狩」の背景を論じるにあたり、同じく「武士が地蔵菩薩から太刀を授かる」という構成を持つ、壬生寺本尊の太刀説話を取り上げる。まず、六巻本と他書の同話を比較し、それぞれの典拠と説話の成立背景を考察した。中でも、六巻本は壬生寺本尊の靈験譚としての性格を強調している。さらに、六巻本と元禄本との比較から、両本の特徴が時代背景と一致していること、元禄本は広く庶民に参詣をすすめていることを明らかにした。そして、壬生狂言「紅葉狩」が能《紅葉狩》を題材に選択した理由として、説話とのモチーフの類似を指摘した。第二節では、「花盗人」の背景として、「縄で縛られる」説話である、縄目地蔵説話を取り上げる。縁起の典拠を明らかにしたうえで、近世の地誌類や名所案内記から、説話の展開と人々の近世的信仰を示す。「花盗人」は、狂言《真奪》《太刀奪》と一部共通し、独自性として「桜」という要素を持つ。これらが選択されたきっかけと独自部分の意味について、説話と共通するモチーフという観点から検証する。「紅葉狩」「花盗人」は靈験譚が演目選択に関わっている。それぞれの説話は時代にあわせて変化しており、壬生狂言は近世的信仰を背景として展開していったのである。また、両演目はいずれも独自部分を持ち、それらは観客に壬生寺本尊の功德を意識させる。壬生寺という固有の空間が大きな役割を果たしているといえよう。元禄期の演目は、地獄を題材とせず、能・狂言と題材を同じくするという点で娯楽的に発展してい

るが、宗教的にも発展しているのである。

第三章では、寛政元年の大坂出開帳に伴う上演について考えた。まずは開帳に至るまでの経緯と人的ネットワーク、そして、当時の演目と観客の反応を明らかにした。本上演では、天明の大火からの壬生寺復興のため、多くの観客を集める必要があった。観客は、演技のみならず、付与された宗教性や利益に注目している。壬生寺の宗教性は、壬生狂言の芸能としての独自性となっている。一方、壬生寺も壬生狂言の存在を開帳の独自要素として、人々の参詣をすすめたのである。

本末関係制度の確立や人々の信仰に伴い、寺社はそのあり方に変革を求められる。壬生狂言はその状況において有効に機能していたが、娯楽性のみならず、宗教性を維持したところに、特質の一つがあるといえよう。それが独自の型にも反映されている。

壬生寺と壬生狂言とは、きわめて深いつながりがある。壬生狂言にとって、宗教性はいうまでもなく、娯楽性も壬生寺という空間に根差したものである。他の場で、あるいは壬生寺を離れての展開は不可能であったといえよう。寛政元年の大坂での上演は緊急事態への対応であったが、壬生狂言がそれまで築いてきた展開とあり方を再確認する機会でもあった。寛政まで壬生狂言を壬生寺以外で演じなかったのは、その必要がなかっただけでなく、空間に基づく宗教性こそが壬生狂言の核心であったためである。

資料として、六巻本詞書の翻刻・注釈および寛政元年の大坂出開帳関係資料(壬生寺所蔵文書)の翻刻を付した。